

# 光といのち

第111号

—春彼岸—

2018年3月10日発行

発行所

真宗大谷派勝善寺

〒299-2214

千葉県南房総市二部1344

電話 0470-57-2657

FAX 0470-57-2290

メール info@syozenji.or.jp

URL http://syozenji.or.jp/

住職 釋孝昌（井上孝昌）

法語

南無阿弥陀仏も  
間にあわぬから  
南無阿弥陀仏

藤原 正遠

## なぜ、葬儀や法事をするのか

「残念ながら、私のおります寺でも真宗門徒でありながら、同じ門徒として信仰共同体というかたちでつながっている人は、ほんのわずかであります。あとの人は、ほとんど墓参り中心のかかりです。墓参りという縁だけで寺院との関係が保たれている人が多いのです。その中で南無阿弥陀仏に依って葬儀を執行するということは、たいへんな願心と勇気と情熱が要請されます。



故 二階堂 行邦 先生

わたしもずっと住職をやってきました、葬儀がどんどん葬儀でなくなってきました。

るということを痛感しています。一言で言えば、葬儀が企業化されていく。空洞化している。世俗化している。葬儀社さんも、葬儀が何なのか、わからないで企業としてこなしているだけです。葬儀社さんも、本当は困っているんでしょね。

そうなりますと、葬儀をたのむ遺族も、いよいよ葬儀そのものをどうして勤めるのかわからなくなると。「それならば葬儀をやめてお別れの会でいいんじゃないの」というような傾向が進んできています。いま、葬儀社さんの話だと数年前で平均して二十パーセントの人は「葬儀はいいから別れの会がいい」と答えるそうです。あるいはまた、茶毘葬というように、葬儀をやらないうで、火葬場の炉の前で勤行するだけの場合も多いそうです。

す。「正信偈」さえも勤める時間がないのです。

私のおります寺でも昨年、何件かありましたが、葬儀はしたいのだけれども、お金がかかるとしてもできない。年寄りの一人暮らしで、子供がいないので、甥や姪が葬儀をする。そういう少子化時代の家族状況もあります。その中で葬儀をしていこうというのですから、その人の人生の最後を受け取るためにはどうしても葬儀は必要なんだということを、どこで言えるのかということがよほどはつきりしないといけない。そのことがいよいよ僧侶にも門徒にも問われてきたのです。」（南無阿弥陀仏の

## 春彼岸会

三月二十一日（水）

春分の日

十時～十一時三十分

法要 正信偈念仏和讃

法話 住職

「なぜ、法事をするのか」

※念珠・門徒章をお持ちください。

葬儀』東本願寺出版部より）

## 葬儀

南無阿弥陀仏の

二階堂 行邦

東本願寺  
伝道ブックス61

これは、二階堂行邦先生が10年ほど前にお話しされた内容です。先生は、東京都新宿区にある寺の住職でありました。

東京の風習は、10年後には房州に移ってくると言われます。先生がお話しされた状況が、今、房州でも起こってきています。葬儀の仕方が、ずいぶん変わりましたよ。

法事も同様です。なぜ、法事をするのか。ここが大事どころです。

主催者になれば、実は大変です。僧侶との日取りや時間の調整、どなたに来ていただくか、お膳はどうするか、引き物はどいうするか。今は、法事を行う場所も、自宅か寺か葬儀社のホールとかと迷います。さらには、何回忌まですればいいのか、ということもありますね。

春彼岸会では、このことをお話しする予定です。

昨年530頁の報恩講話の一部です。講題の「教授の恩徳」という言葉は、親鸞聖人のご著書『尊号真像銘文』(『真宗聖典』530頁)にあります。

「他力の信心」の教授をいだけた恩徳という意味です。「その恩、重き深きことを思い知るべし」と、親鸞聖人は、仰います。

## 教授の恩徳

了善寺住職 百々海 真師

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏・・・  
もしみおしえにあわざれば  
生まれしこともむなしけれ。  
もしよきひとにあわざれば  
今日のよろこびしらざらん。  
南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏・・・



石川県加賀市に片山津という温泉町がありますが、そこに「ケアハウス和(やわらぎ)」という老人保健施設があります。デイサービスセン

ターも併設されている介護保健施設、いわゆる老人ホームです。実は、昨日一昨日の二日間、私はその施設におりました。鉄筋6階建てで大きなマンションのような施設です。入居者の居室は78室あり、特別養護老人ホームではありませんので、要支援の方、ご高齢になられてマンション代わりに暮らす方もおられるようです。

施設名の「和」は、ご存じでしょう。聖徳太子の『十七条憲法』の第一条に「和らかなるをもつて貴しとし、忤(さから)うること無きを宗とせよ」(『真宗聖典』963頁)とあります。暁鳥敏先生のご門下であり、林暁宇先生に師事された谷田暁峰先生が「和」と命名なさいました。運営主体は「社会福祉法人加賀福祉会」といいますが、実は石川県美川の仏壇店の社長が理事長なのです。理事長は勝見博徳さんですが、見かけも漆の塗師、職人そのものですから、施設の庭いじりをされている姿を見ると、とても理事長には見えません。根っからの仏壇職人ですから、福祉についてはまったくの素人だったのに、仏法に出遇ったら使命を尽くしたくなり、

一念發起された。現在は「やわらぎ 太子の家」というグループホームも運営されています。国や自治体からの補助金も含めれば開所資金だけでも十億円を超すような資金規模の事業です。自ら銀行融資を受け自己資金も投入して、敷地を購入し、平成13年に開所にこぎつけ、現在も運営されています。本山から発行されている『同朋新聞』の2013年4月号の巻頭に理事長父子のインタビュー記事が掲載されたことがありますので、覚えている方もおられるかもしれません。

この施設の1階食堂の奥には、大きなお内仏(仏壇)があり、仏間になっています。昨日までの二日間、報恩講を勤めてきたのです。春には花まつり、毎月二回開法会が開かれています。理事長は真宗高田派の僧侶、子息の専務理事は真宗大谷派の教師です。私は老健施設という名の「寺」だと、真の意味での道場だとひそかに思っております。ここのパンフレットは、凄いです。他の施設では、まず書いていないことがハッキリ書いてあります。理事長の挨拶には「人は、何ひとつ持たずに生まれ、何ひとつ持たずに死んでい

かなければなりません。家族も、財産もみんな置いていかなければならないのです。もちろん自分の意思とは関係ありません」と、つまり「人間は必ず死ぬ」と書いてあるんですよ。(笑い)老人施設では、こういうことは言わないでしょ。ほんとうの話は、避けます。ですが「人間は必ず死ぬ」ということは、禁句ではなく、生命の厳粛な事実。生まれた限り、死に至るのは必然でしょ。生と死は切り離せないけれども、それを覆い隠し見ないようにして、「元気で健康に」と。それこそ、不健康ではないですか。疑問が湧きませんか。

一息の命を生きるということ。万人共通の厳粛な事実なんです。その食堂の真ん中には谷田先生が書かれた「以和為貴 無忤為宗」、聖徳太子『十七条憲法』第一条の掛軸が掛けられています。

一昨日の夜は職員研修、昨日は報恩講の日に30分ずつ2席、計60分の講話のご縁に遇ってききました。入所者には車椅子の方も多かったですし、林暁宇先生や谷田暁峰先生のご縁の方々もお参りされて、全部で70人から80人のご参詣でした。仏間は、一杯

でした。

報恩講は、前日に速夜法要を勤められ、大谷派の教師である専務理事が法話をなさり、翌日の日中法要では私が法話を担当させていただきました。一週間ほど前にお磨きもされ、お勤めにはやはり大谷派教師である瀬川さんという入所者が法衣をつけて出仕されま

す。瀬川さんは、ご自宅を聞法道場にされていた方で、和田稠（しげし）先生のお育てを長らく受けたお方です。

私は七年ほどご縁をいただいていますので、様子が分かってきたのですが、ご参詣の方々の内、何人かは耳が聞こえないのですよ。耳が聞こえない、つまり法話が聞きとれないのに、何故参詣され座っておられるのか。時折領きながら、聞いておられます。

私自身が聞法の深さを、あの爺ちゃんや婆ちゃんに教えられていきます。耳が聞こえないのですから、私の声は届いていない。が、晴れ晴れとしたお顔で、領きながら聞かれる。この人を領かせている力は何でしょうか。何と呼ぶのでしょうか。

ところで、入所している方々が聞法して愚痴が出ない人間になっただけではないんですよ。

ロビーで会ったお婆ちゃんからは、「もう死にたい」という話を持ちかけられました。「ここは結構なところだけれども、嫌だ。おもしろくない」と。

そういう者だからこそ、南無阿弥陀仏。何にも間に合わないのです。聞いて覚えてわかったことも、感動したことも間に合

われない。嫌なもの嫌なものです。「南無阿弥陀仏も間にあわぬから南無阿弥陀仏」。藤原正遠（ふじはら しょうおん）先生のお言葉です。間に合う・間に合わない、納得できる・できない、理解できる・できないを超えて、私たちを生かす死なしめる力が他力です。ですから他力は、私の主体外に見えない。内から勅命が来る。時には「死にたい」とも。

耳が聞こえないままに聴聞されている方は、きつとお若い頃から聴聞されてきたのでしょうか。伝統が崩壊しつつあると言われませんが、さすがは加賀の土徳です。私が話す声は聞こえなくとも、内から聞えてくる。聞法は、聴力の問題ではないんですね。法が聞える一瞬を人間の上に聞くのが、本願が成就した相（すがた）ではないかと「和」の報恩講にお参りするたびに感

じています。

2011年以来報恩講に伺っていますが、最初はわかりやすい、やわらかい話をしなければと力んで計らっていましたが、近年はそんな思いが飛びました。

耳が聞こえなくても聴聞の座に身を運ぶ。そういう人間、求道者を生みだしてきたんですよ。浄土真宗は、むしろそういう人間を生み出す他に法の存在証明はあり得ません。

しかし、「聞く」という仕事がいかに大変か。格闘ですよ。

この房州の地で、「わからない」「納得できない」ということをこの寺に持ち寄ることで、生きた通いあいが必要になります。聞いたことを生活の事実の上に確かめようとすれば、必ず挫折もし、マンネリにもなります。

ですが、むしろそれがチャンスです。それが一声の南無阿弥陀仏に導かれて、一座ここに座ることの深さです。

何度も申しませんが、「今日私をここに座らせている力は何か」という一点を聞いていく。向こうに

見ないのです。

「今日はお参りしたから、住職に顔が立つ」とか「世話人さんに言われなくて済む」という差し迫った動機もあるのかも知れませんが、私の動機を奪って

くださるのが阿弥陀様なんです。5分延びているのはわかっていますから、もう止めます。(笑い)

「教授の恩徳」とは、「出遇い」です。そして「出遇い」とは、始まること。終わりではない。師匠から教わったことを自分の上に確かめつづける。その歩みの中で師友に出遇う。その出発点として「教授の恩徳」。左うちわで感謝、感謝ということではありません。行き止まりの感謝ではない。

私たちは、都合の良いことしか感謝できないのですから。現実には感謝どころか愚痴でしょう。感謝できない現実こそが生きる現場です。

本当に雨の中をようこそ最後までお参りくださり有り難うございます。

南無阿弥陀、仏南無阿弥陀仏・・・

「ケアハウス和」の理事長 勝見博徳さんは、「仏法に出遇ったら使命を尽くしたくなり、一念発起された」。

「教授の恩徳」に報いる人生を歩んでいらつしやる。

「出遇い」とは、始まること。終わりではない」と、力をいただきました。

※『同朋新聞』の2013年4月号は、寺にあります。

# 花まつり

4月8日(日)

13時30分〜15時30分

「花まつり」は、おしゃかさまの誕生を祝う行事です。

おしゃかさまが誕生されたとき、天から花びらがふり甘露もふってきました。「花まつり」といい、おしゃかさまの像に甘茶をそそぐのは、そのわけです。紙芝居やお抹茶もあります。子どもも大人も、おまいりください。お手伝いしていただくと、うれしいです。



## 勝善寺で親鸞教室

4月26日(木) 12時30分〜受付  
「和讃をいただく」海法龍先生  
参加費 1000円

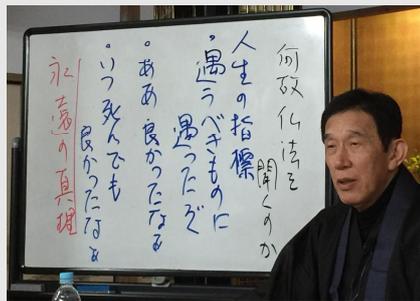


次回は、市川市  
即隨寺です。  
住職の運転で、  
往復します。

## 第5回水島見一先生聞法会

6月10日(日) 15時〜法話①  
6月11日(月) 10時〜法話②

※日曜と月曜です。ご注意ください。  
テキスト『歎異抄白日抄』1000円  
御懇志をいただければ、幸甚です。



初めての参加もOK  
仏法の事は、いそげ、いそげ。

## 81枚の雲龍図

当寺本堂格天井の雲龍図は、明治時代に川名楽山らにより描かれました。

「南房総市勝善寺」と検索し、当寺ホームページ「勝善寺を知る」↓「図解 本堂格天井雲龍図」で見ることが出来ます。



「図解 本堂格天井雲龍図」  
1-3

二部中組の「鎌田さん」こと石井和夫様(横浜在住)が、何度も訪れ撮影し、寄進くださいました。

本堂内は暗いので、写真の方が肉眼より鮮明に見えます。

寄進された方の名前が書いてある絵図もあります。130年ほど前に生きたご先祖様の名前を発見できるかも！

「予定ください！」

- 3月21日 10時〜 春彼岸会
- 4月8日 13時30分〜 花まつり
- 4月26日 13時〜 親鸞教室
- 5月7日 14時〜 同朋の会
- 5月11日 中佐久間講
- 6月3日 八日講十日講・同朋の会
- 6月6日 東京教区同朋大会
- 6月10日(日) 11日(月) 第5回水島見一先生聞法会
- 6月15日 千葉組婦人研修会
- 6月22日 親鸞教室
- 6月24日 8時30分〜 奉仕作業
- 6月28日 千葉組同朋総会
- 7月22日 14時〜 同朋の会
- 8月10日 孟蘭盆会
- 9月23日 秋彼岸会
- 10月7日 14時〜 同朋の会
- 10月21日 13時30分〜 世話人総会
- 10月未定
- 第6回水島見一先生聞法会
- 11月12日 13時30分〜 仏具磨き
- 11月16日 13時30分〜
- 報恩講 準備と速夜法要
- 11月17日 6時15分〜 晨朝法要
- 10時〜 日中法要

※：以外は当寺が会場です。